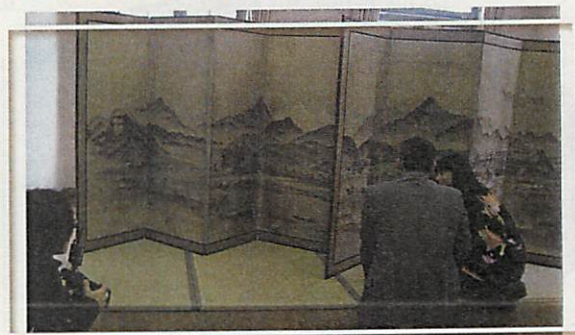


女優の山口智子さんが津山郷土博物館に来館！

雑誌「^{わらく}和楽」の山口智子さんの連載ページ「山口智子が古きに学ぶ ときめきの日本」に、津山藩お抱え絵師、鉾形恵齋が取り上げられることとなり、その取材のため、女優の山口智子さんが津山郷土博物館に来館しました。

山口さんは、鉾形恵齋の画風や経歴に非常に関心をお持ちで、ぜひ津山を訪れ、恵齋の代表作である江戸一目図をみてみたい、との希望もあり、今回の



津山景観図屏風の前で、真剣に話を聞く山口さん

取材が実現しました。「江戸一目図屏風」と、「津山景観図屏風」を御覧になった山口さんは、江戸一目図屏風や津山景観図屏風に描かれている風景や人物の細かな描写にとっても驚かれた様子で、取材が終わった後も、限られた取材時間ギリギリまで屏風の前を動かず、じっくりと御覧になっていました。

取材の内容は、3月6日発売の雑誌「和楽」4月号に掲載される予定です。

江戸一目図の前で、スタッフとともに
(右から二番目が山口さん)



特別展

「庄野ヒカルの世界」、大盛況のうちに閉幕

平成20年10月4日から11月24日まで、平成20年度特別展「庄野ヒカルの世界」を開催しました。

庄野ヒカル（本名：松子）は、津山市田町出身の画家です。日本画、油絵、水彩画などの制作に励むと同時に、ファッションデザイナーとしても才能を発揮しており、第1回ピエールカルダン賞を受賞しました。故郷津山では服装専門学校で教壇に立ち、一方では絵画教室で子どもたちに絵を教えるなど、服飾、絵画両方の分野で活躍しました。

題材の大多数を占めるのは「花」と「子ども」です。今回の特別展で展示した作品も、風景画や色紙に描かれた干支の動物などもみられますが、大多数は多種多様な花々と、外国の少女や遊び回る子どもを描いた作品です。そのせいか、特別展示室は色鮮やかな、明るい雰囲気になりました。来館者の中には、「昔、庄野先生に絵を習っていたので、とても懐かしいです」「庄野先生の作品が一度にこれほど沢山みられる機会があるなんて」など、かつての思い出に浸る方もおられたようです。

特別展で展示したのは約300点ですが、自宅に残されていた日本画、油絵、水彩画などは、合わせて1500点にのぼります。これらの作品はすべてご遺族のご厚意により津山郷土博物館に寄贈されました。



展示風景

吉川氏ゆかりの史跡を探訪

平成20年9月13日（土）に、第80回文化財めぐりを開催しました。今回訪ねたのは、広島県北広島町（平成17年に千代田町、豊平町、大朝町が合併）です。午前8時に郷土博物館を出発し、吉川元春が隠居する住まいとして建てた館の跡や、吉川家の墓所がある吉川元春館跡、元長によって建

戦国の庭歴史館にて



立された寺院である万徳院を目指しました。いずれも近年の発掘調査によって、建物の礎石や庭園の石組みなどが良好に残っていることが分かり、当時の様子が分かるよう整備されています。また、併設のガイダンス施設「戦国の庭歴史館」では、発掘調査によって見つかった当時の様々な日用品や、法華経の版木などの珍しいものをみることができました。北広島町教育委員会

職員の方の分かりやすく丁寧な説明により、参加した27名の皆さんは興味深く見学をしていました。その後は、吉川家の居城の一つである小倉山城や、古保利薬師などを訪ねました。

津山とその周辺の様々な地域の文化財を丁寧に学ぶことのできる文化財めぐりも80回を数え、今や博物館友の会の欠かせない行事となりました。今後も、津山市内だけではなく、時には遠方にも足を運び、その地域で育まれた文化を肌で感じることができる文化財めぐりを目指していきます。

墨書土器「少目」、14年ぶりの実物展示へ

博物館2階常設展示室、美作国府跡の出土遺物のコーナーに、新たに墨書土器が追加されました。この土器は、美作国府跡の井戸の中からみつかったもので、中国自動車道建設にともなう岡山県教育委員会の発掘調査で出土しました。土器は土師器の椀で、井戸が埋没した最終段階の埋土から発見されたものです。底部外面に「少目（しょうのさかん）」の文字が墨で書かれています。

「少目」とは、国の官職である「^{かみ}守・^{すけ}介・^{じょう}掾・^{さかん}目」の第四等官にあたる役職を示す言葉です。『続日本紀』卷三十三 宝亀六年三月乙未条に、「始置伊勢少目二員。（中略）播磨少目二員。美作。備中。阿波。伊予。（後略）」とあります。これは、宝亀六年（775年）に少目という官職が新設され、美作国などに置かれたことを示しています。この「少目」が書かれた椀は、土器そのものの年代と、その土器がみつかった井戸が使用されなくなった時期を示す重要な手がかりとなるもので、美作国府跡からみつかった遺物の中でも注目すべきもののひとつです。これまでは写真パネルのみの展示でしたが、保管場所が岡山県古代吉備文化財センターから津山市教育委員会となったため、実物の展示が可能になりました。郷土博物館での展示は平成7年の特別展以来14年ぶりとなります。古代の文字資料として貴重な墨書土器の実物をぜひご覧下さい。



常設展示される墨書土器「少目」
（椀の外面の底部に書かれている）

～伝・岡高塚古墳出土の筒形銅器～

右の写真は、郷土博物館1階の古墳時代展示部分に展示されている、筒形銅器と呼ばれるものです。出土したのは、勝田郡勝央町岡にある岡高塚古墳と伝えられています。岡高塚古墳は、全長56mの前方後方墳で、埋葬施設は竪穴式石室です。筒形銅器以外の出土品としては、鉄剣、鏡、玉、土師器などがあります（鏡は郷土博物館1階に展示）。

筒形銅器は、古墳時代の墳墓から出土する青銅（銅と錫の合金）製品です。一見したところ、一体何の用途でつくられたのか、全く見当がつかない不思議な遺物です。また、これまで日本の遺跡で出土しているのは約70例であり、その多くが大和や河内といった、古墳時代の日本列島の中心地というべき地域に集中し、西日本での出土が大半を占めていることも大きな特徴といえます。出土する古墳の時期も古墳時代前期（4世紀）後半～中期（5世紀）前半に築造されたものがほとんどです。これは、古墳の副葬品の中では少ない特殊なものといえるでしょう。美作では岡高塚古墳のほかに、四つ塚一号墳（真庭市）からも、筒形銅器が出土しています。



筒形銅器(伝・岡高塚古墳) 当館蔵

筒形銅器の形状は、名前のとおり写真上から下へ裾広がり「筒」状になっており、下の広がった部分はふさがっています。伝・岡高塚古墳出土のものは、長さ18.4cm、直径は上部で2.5cm、下部で3.2cm。上部は段がついていて少し厚みがあり、二方向に目釘穴があります。さらに、筒部の上下二段に四方向の細長い穴がみられます。筒状部分の中には、長さ約7cmの青銅製の細長い棒が入っていることから、棒が揺れ動くことによって共鳴音を出す、いわば鈴のような機能も備えていたことが推測されます。

筒形銅器の機能や用途については様々な説がありますが、主なものとして、槍や矛（ほこ）の柄の部分につける石突（いしづき）であるとする説、杖の先端につけた装飾であるとする説などがあります。

では、筒形銅器はどこで製作されたのでしょうか。それを知る手がかりとなるのが、朝鮮半島南部、古代に伽耶（かや）と呼ばれていた地域にも筒形銅器が多数みつまっていることです。その数は日本での出土数と同じぐらいですが、日本の場合、1つの古墳から出土するのは1～2個であるのに対し、伽耶地域の墳墓では、1つの墓から8個の筒形銅器が出土した例もあります。近年では朝鮮半島での出土数が増加したことから、日本でつくられたとする説と朝鮮半島南部でつくられた説の両方があり、依然として定まっていないのが現状です。

考古資料では、使用方法がよく分かっていないものについて、○○形土器、△△形石器…などと呼ぶことがしばしばあります。筒形銅器もそのうちのひとつといえるのではないのでしょうか。

いろいろと謎の多い筒形銅器ですが、古墳時代の日本と朝鮮半島との交流を物語る重要な資料です。

「トンボ玉づくり」、

勾玉づくりを上回る人気講座へ躍進？

平成20年11月1日（土）、郷土博物館歴史体験講座として、市内の小学5、6年生20名を対象に「トンボ玉づくり」を行いました。トンボ玉とは、色ガラスで様々な文様がつけられているガラス玉のことです。「トンボ玉」の用語自体は江戸時代から使われていたもので、トンボの目玉のような模様をさしてこのように呼ばれていたと考えられます。今回の講座では、トンボ玉の歴史についての説明をした後、推測されている古墳時代のトンボ玉の製作方法に基づき、実際につくってみました。

トンボ玉は、細長い鉄の棒に、色つきのガラス棒の先端をガスバーナーの炎でよく溶かしたものを巻き付けてつくります。巻き付けたガラスは、一端炎からはずしてしまうと割れてしまうことが多いので、一度巻き付け始めると、ガラスを溶かしながら、自分の好みの大きさになるまで炎の中で鉄の棒を回し続けます。巻き付けが終わると、形を整え、しばらく冷ました後、鉄の棒から玉を外してできあがりです。鉄の棒の部分が玉の穴になります。

はじめはガスバーナーの炎の勢いに驚き、おそるおそる鉄の棒とガラス棒をもっていた参加者の皆さんも、トンボ玉の丸い形ができはじめると、あちこちから歓声があがりはじめました。中には思い通りの形にならず、悔しい思いをしている人もいたようですが、大小、色とりどりのトンボ玉ができあがり、最後には、体験講座の時間がすぎても参加したほとんどの人から「もう1回！」の声。実際、職員らが講座前に練習を行った際も、最後にはすっかりハマってしまっていたので、気持ちは十分理解できるのですが…。

今回のトンボ玉づくりは、博物館でははじめて実施する講座でしたので、作り方を教える職員も、技が熟練されていないままの状態で大仕事をこなしました。参加した小学生の中には、トンボ玉づくりの経験者もいて、職員が逆にコツを伝授してもらった一幕もありました。



トンボ玉づくりの材料



うまくつくれるかなあ…

つくり方を説明

ひとこと

「博物館だより60号」では、これまでのロゴを変更しました。いかがでしょうか。

さて、今回はトンボ玉づくりについて少し詳しく書かせていただきました。好評を得ている勾玉づくりに続け！と言わんばかりの勢いで申し込みが殺到し、受付開始後30分で受付終了に。しかも、トンボ玉＝アクセサリーのイメージが強いのが、なぜか20名全員が女の子でした。これからもこの講座は継続していく予定ですので、男の子もぜひ申し込んで下さい。友達同士での応募、歓迎です。

また、要望があれば学校にも赴きます。詳しくは津山郷土博物館までお問い合わせ下さい。

博物館入館案内

- 開館時間：午前 9：00～午後 5：00
 - 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
 - 入館料：一 般 210円(160円)
高校・大学生 150円(120円)
中学生以下 無料
- ※()は30人以上の団体

博物館だより No.60

平成21年2月1日

編集・発行：津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 ☎(0868)23-9874
E-mail : tsu-haku@tvf.ne.jp
印刷：株式会社廣陽本社